

繰り返される惨事。自動車事故は 100%人災でしょうか？

魚田勝臣(専修大学名誉教授)

2016年3月、東広島市の山陽自動車道のトンネルで、トラックが渋滞中の車の列に突っ込んで2人が死亡し多数が負傷した事故。運転手が居眠りの疑いで逮捕されたとあります。

1月には、長野県でスキーバスの転落事故があり、たくさんの若者が亡くなりました。運転手が死亡しているので、まだ原因は究明中とありますが、規定速度の2倍程度で走行していたことははっきりしているようです。

2月には、大阪梅田駅前のスクランブル交差点で、プリウスが暴走して歩行者をはねた事故があり3人が亡くなりました。運転手が、心臓血管破裂で意識を失った後、車が暴走したとのことです。

いずれの事故も、運転手の問題にして、終わりで良いのでしょうか。それでは悲惨な事故はこれからも繰り返されることになります。

情報システム学会としては、「ちょっと待てよ、どこかおかしいのではないか？」と言うことになりませんか。人間中心の情報・情報システムの立場から考えて、大所高所からどう考えるべきか明らかにして、世の中に聞きたいと思います。

人間は神ではないので、間違いも起こすし、うっかりもあります。元気であった人が突然死んだり人事不省になることだってあるのです。そうした時に、それを補う技術や制度を働かせる必要があると思います。

現代は自動運転の車が走る時代です。身近なことでも、乗用車に、飛び出しや急発進の検知・停止機能、車線はみ出し警告や前車追尾機能、車庫入れ機能など安全安心機能が、合理的な価格で装備できるようになっています。同じ乗り物の仲間である電車には、以前からデッドマンノブのような、運転手が突然死したときに緊急停止する装置が装備されています。

上に述べた事故に、こうした技術が適用されていたらどうでしょう。トラックの場合、運転手の居眠りを検知する機能が働いて、事故が防げたか軽微で済んだ可能性があります。バスの場合も、速度の検出・抑制装置や車線はみ出し制御装置によって、暴走や転落が未然に防げたかも知れません。プリウスの場合も、安全装備をした新型プリウスであったなら、人を検知して止ったかも知れません。このように考えると、技術を適用するためのコストを掛けるかどうか決断の問題に行き着きます。

一方、トラックにはトラックの業界が、バスにはバスの業界、自動車にも同じ、それぞれに業界や団体があり、研究者や専門家がいて、それぞれの立場で研究し対策を考えています。問題はそれぞれが殻の中で考えていて、領域を侵さないようにしているところにあると思います。情報システム学会としては、人間中心の情報・情報システムの観点から、それぞれの仕組みを串刺しにして、大所高所から概念や哲学を提唱できるのではないのでしょうか。また、市民に対して、自ら情報を集め考えて行動するための情報に対するリテラシを持つように働きかけ、教育援助する必要があると思います。

みなさまは、それぞれの立場で、この問題を如何お考えでしょうか。